

教科書に掲載された「保育課程」における 5 領域の分析と評価

A The Analysis and Estimation of Five Domains about the Childcare Course in Textbook

庭野 晃子

NIWANO Akiko

I. はじめに

2008 年、保育所保育指針（以下「保育指針」と省略する）が改定された。この改定により、保育指針は、これまでの局長通知から厚生労働大臣による告示となり、法的拘束力が発生した。また、「大きな特徴として、保育所における「保育計画」が「保育課程」に改められ、「保育課程」の編成が義務づけられることになった」（余公 2011：42）。保育課程は、月間・年間指導計画等の長期の指導計画と週間指導計画や日案等の短期の指導計画、食育計画等の各種指導計画の上位に位置づけられるものであり、それらをあわせて「保育の計画」という。保育指針では、保育課程は、子どもの発達過程を踏まえ、保育指針の第 3 章保育の内容に示されたねらい及び内容が保育所生活の全体を通して、総合的に展開されるよう、編成されなければならないと明記されている。すなわち、保育課程において、子どもの年齢に応じた保育の内容「健康」「環境」「人間関係」「言葉」「表現」の 5 領域のねらい及び内容を定め、それに基づいた各種指導計画を作成することが求められている。

保育課程に関する先行研究は、保育課程の編成が義務づけられてから約 5 年が経過したにもかかわらず、大まかな枠組みについて論じたものがほとんどで、具体的内容に踏み込んだ研究はごく僅かである。そこで本研究は、教科書に掲載された保育課程の事例を対象に、5 領域の内容を分析する。

II. 先行研究

大坪（2008）や丹羽（2011）は、保育指針や教科書を参考に、保育課程の編成の手順について整理している。余公（2010）と余公（2011）は、保育指針の歴史的変遷を辿りつつ、2008 年の改定をふまえながら、保育課程の位置づけを明確にしている。清水ほか（2011）は、全国の保育所が編成した保育課程を収集し、その編成状況を調査している。分析の結果、2011 年時点では保育課程を編成していない保育所も少なくなく、また、保育課程は画一的であると指摘している。庭野（2012a）は、保育課程に関する教科書を対象に、①保育課程の概念説明、②保育課程と指導計画との関係の説明、③保育課程の編成手順の説明、④保育課程の具体例の有無、⑤保育の評価に関する説明について分析している。これらの研究は、保育課程の枠組みについて論じており、具体的な内容については、ほとんど論じられていない。

一方、庭野（2012b）は、保育課程の内容に一步踏み込んで分析をしている。庭野は、教科書に掲載された保育課程、年間指導計画、月間指導計画における保育内容の連続性に焦点をあて、それらの記載内容が一貫しているかどうかについて分析をしている。保育の 5 領域の記載内容を示しながら、その内容に連続性があるかどうかを考察しており、連続性が保持されているもの、保持されていないものがあることを明らかにしている。次に、田中（2012）は、保育雑誌 4 誌に掲載された「年間指導計画」の 3 歳から 5 歳までの保育の 5 領域の記載内容の分析を試みている。この分析は、「年

間指導計画」における5領域の記載内容が、幼稚園教育要領のねらいと内容にどの程度対応しているかを数値で示し、記載内容と年齢や期との関係等について分析している。その結果、各領域において、3歳から5歳までに10回以上登場する内容や、逆に、1回以下の内容があること等を明らかにしている。また、5領域全体をみると、登場回数の多い領域と少ない領域があり、その格差が大きいと指摘している。さらに、ねらいと内容が対応していないものが多く、記載内容が年齢や期にふさわしいか疑問に思われるものがある等の指摘をしているが、具体的にどのような記載内容が年齢や期にふさわしくないかは不明である。田中による研究は、これまでの先行研究とは異なり、5領域の内容に踏み込んだ分析として独自性の強いものである。しかし、詳細な分析方法についての記述はみあたらず、必ずしも分析に対する考察がなされているわけではない。

庭野(2012b)や田中の研究は、保育の5領域の内容に踏み込んだ数少ない研究だが、庭野は、1歳と3歳のみ限定され、田中は、3、4、5歳のみ限定された分析であり、また、両研究ともに、保育実践にどう生かされるのかについて明確な提言がない。これに対して、清水ほか(2011)は、自治体が編成した「保育課程」の「言葉」の内容から、子どもの言葉の発達を促すために必要な教材や、保育者の配慮事項について言及している。さらに、子どもの言葉の発達をたしかめるための観察項目の作成を試みている。この試みは、保育実践に役立つだけでなく、保育者の養成教育においても貢献できるものであり、このような研究を進展させていくことが望まれる。

そこで、本研究は次の2つを目的とする。第1に、田中の研究を参考に、保育課程の5領域の内容を、分析視角や選定基準等を設定したうえで分析を行う。第2に、第1の分析をふまえ、清水ほかの研究に倣い、保育課程の「言葉」の領域に焦点をあて、子どもの言葉を伸ばすために必要な教材や、保育者の配慮事項を把握し、子どもの発達をたしかめる観察項目を作成することを目的とする。

以上2つの目的をもつ本研究は、次の点において意義がある。まず、保育内容の5領域の分析方法を明確にすることにより、他の分析対象との比較分析を可能にする。もう1つは、保育課程の「言葉」の記載内容を読み取り、教材の選択から観察項目の作成までできる保育者の養成に貢献し、保育現場ですぐに活用することができる。

Ⅲ. 研究方法

ここでは、研究方法について述べる。まず、分析対象となる教科書と保育課程の事例の選定基準について説明し、次に、分析視角と、分析の手順について示す。

分析対象となる教科書の選定基準は、庭野(2012a)(2012b)と同様とするため省略するが、便宜的に庭野(2012a)で示した教科書の番号をそのまま引用することにする。

本研究の分析対象である教科書は、12冊である。各教科書において、保育課程の事例が1事例のみ掲載されているものもあれば、複数掲載されている教科書もあったが、本研究では、すべての事例を対象とする。

次に、本研究が分析対象とする保育課程の事例の選定基準を述べる。第1に、ある特定の年齢の保育内容だけでなく、0歳から5歳までの年齢の保育内容が記載されていること。第2に、保育の内容「健康」「環境」「人間関係」「言葉」「表現」の5領域すべてが明示されていること。第3に、概念図で簡単に示したものでなく、年齢と保育内容がクロスされ一覧表となっている保育課程とする。この3つの条件に該当する保育課程は、全部で13事例であった。次頁に保育課程の13事例を示す。なお、同じ教科書に複数の事例が掲載されているものについては、2-1、2-2というように番号を付けた。

番号	保育課程の事例	教科書名
1	p24 (公立A保育園)	新保育課程・教育課程論 (同文書院) 2011
2-1	p33 (D保育園)	保育課程論 (北大路書房) 2011
2-2	p34-35 (A保育園)	
3	p74-75 (品川区公立保育所)	教育課程・保育課程論 (光生館) 2010
4	p170-173 (赤間保育園)	乳幼児の教育保育課程論 (建帛社) 2010
5-1	p18-19 (プリプリ保育園)	新保育所保育指針サポートブック 保育課程から指導 計画作成まで 今日から使える! (世界文化社) 2010
5-2	p20-21 (ワンダー保育園)	
6-1	p71-70 (参考例②)	新指針・新要領イラスト図解ガイド: 保育課程の参 考例も解説 (ひかりのくに) 2009
6-2	p69-68 (参考例②)	
7-1	p21-23 (たんぽぽ保育園)	独自性を活かした保育課程に基づく指導計画: その 実践・評価 (ミネルヴァ書房) 2011
7-2	p24-27 (芦穂崎保育園)	
7-3	p29-31 (青戸福祉保育園)	
7-4	p178-181 (かもめ保育園)	

図1 分析対象となる保育課程の事例

次に、分析視角について述べる。第1に、田中の分析に倣い、保育指針のねらいと内容が、保育課程の事例とどの程度対応しているかに着目する。これにより、保育指針のある特定のねらいと内容に偏っていないかどうかを把握できる。第2に、各事例に記載されたねらいと内容が、年齢にふさわしいものかどうかに着目する。保育指針では、ねらいと内容が複数記載されているが、番号が付されている。その記載内容を読むと、番号順に、易しい内容から難しい内容へと変化していると読める。本研究では、基本的に、保育指針の記載内容については、番号順に保育内容のレベルが上がっていくという前提で分析する。第3に、ねらいと内容の整合性について着目する。

次に、分析の手順について述べる。まず、保育所保育指針(2008)第3章では、5領域の「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」について、それぞれねらいと内容が記載されており、番号が付いているが、13の事例の各領域において、どの番号のねらいと内容が記載されているか集計をとる。

具体的に説明しよう。事例7-2の領域「健康」の内容の1歳児の欄には、「外遊びが大好きで、体を動かして遊ぶことを好み、散歩に行くことを楽しみにする」と記載されている。これは、保育指針の「健康」の内容「③進んで戸外で遊ぶ。」にもっとも近い内容であるので、③に計上する。事例7-4の領域「環境」の内容の4歳児の欄には、「自然や身近な事物に触れながら、物の色、数や量、形に興味・関心を持ち、比べたり分けたり、集めたりすることを楽しむ。」と記載されている。これは、保育指針の「環境」の内容「⑩日常生活の中で数量や図形などに関心を持つ。」にもっとも近い内容であるので、⑩に計上する。このような要領で、13の事例の記載内容が、保育指針のどの番号に該当するか各領域、年齢別に集計をとる。

しかし、上記のような手順で分析をすすめていったが、事例の記載内容と保育指針を突き合わせていく過程で、どの番号に該当するか判断に迷うものもあった。たとえば、事例に記載されている

内容は、複数行書かれているものがほとんどで、保育指針の内容をそのまま引用しているものもあれば、保育指針に記載されたものと同じ言葉を使って別の表現をしたり、複数の内容を1つの文章に含めているものもあった。また、異なる領域の内容を記載しているものもあった。保育指針の内容をそのまま引用している場合、判断に迷わないが、同じ言葉を使って他の番号の内容に近いものに変えている場合、判断に迷う。そこで、次のような基準を設けることにした。

まず、5領域すべてに共通する基準である。事例に記載された内容が、当該領域の内容かどうかを確認し、領域以外の内容であれば分析から外すことにする。次に、事例に記載された文章をよむと、複数のことを1つの文にまとめている複文が見受けられる。その場合、主節を優先しポイントを1つに絞ることにする。たとえば、「遊びを楽しみながら、体を動かす」という文の中には、「遊びを楽しむ」と「体を動かす」という2つの事柄が含まれるが、主節である「体を動かす」を優先して該当する番号を選ぶことにする。

次に、領域毎に異なる基準である。各領域により、ねらいと内容の数、およびそれらの記載内容も異なるため、各領域の基準を設ける必要があると考えた。そこで、保育指針の各領域で使用されているキーワードやフレーズを抽出し、それらを目安にしながら、できるだけ近いものを選出するという方法を採用した。具体的には、Ⅳ.分析において説明していく。

Ⅳ. 分析

ここでは、保育指針のねらいと内容が13の保育課程の事例に記載されたねらいと内容にどれだけ対応しているか集計をとり、領域・年齢別の一覧表を示す。表に示したねらいと内容の番号は、保育指針のねらいと内容の番号に対応している。また、事例の記載内容が保育指針の何番に該当するかを判断する際、全領域において共通する基準については先に述べたとおりだが、それぞれの領域で注目するキーワードやフレーズを示していく。なお、13の事例全体をみると、ねらいと内容の両方を記載したものは2事例のみで、他は内容だけを記載している。そのため、ねらいの数は僅かである。したがって、下記では、内容の判断基準を示す。

1. 5領域の分析

(1) 健康

保育指針の「健康」の内容は9項目である。番号順に次のキーワードを抽出した。「①安定感のある生活」「②体を動かす」「③戸外遊び」「④様々な活動」「⑤生活リズム」「⑥衣類の着脱、食事、排泄の自立」「⑦見通しをもった行動」「⑧病気予防」「⑨安全を意識した行動」である。

事例の記載内容においてこれらのキーワードが使用されているかに注目し、何れのキーワードも使用されていない場合、文章の意味が最も近いものを選定した。(この他の領域においても同様とする。)

ねらいの数に着目すると、0歳児で各1つ取り上げられている。これは、保育課程7-2の0歳児に記載されたものであり、保育指針の記載内容がそのまま引用されていた。他、ねらいの(1)(2)について記載したものはなく、3歳児以降、ねらい(3)が登場する。ねらい(3)は「健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付ける。」という記載内容であるが、生活習慣が身についてくる3歳頃になって、はじめてねらいとして登場すると考えることができる。

内容の数を確認すると、偏りが大きいことが分かる。①は1つのみ、④は2つ、⑤⑥は4つと少ない。一方、②は37と全体の約34%と3分の1以上を占めている。これに続いて、⑥が24%、⑧

が14%である。

年齢	0	1	2	3	4	5	合計	割合	
ねらい	(1)	1	0	0	0	0	1	13%	
	(2)	1	0	0	0	0	1	13%	
	(3)	1	0	0	1	1	3	75%	
内容	①	0	0	0	1	0	0	1	1%
	②	7	7	4	5	9	5	37	34%
	③	2	2	1	4	1	2	12	11%
	④	0	0	1	0	1	0	2	2%
	⑤	3	0	0	1	0	0	4	4%
	⑥	0	4	9	9	3	1	26	24%
	⑦	0	0	0	0	2	2	4	4%
	⑧	0	0	0	2	7	6	15	14%
	⑨	0	1	0	1	3	4	9	8%

年齢に関連づけてみると、0、1歳児では比較的容易な内容の②③が多く、2、3歳になると⑥の基本的な生活習慣を行う内容へ移行し、4、5歳児では⑧⑨が増え、病気の予防や安全に対して気を付ける等の比較的難しい内容へ移行していると思われることができる。

一方で、発達段階に応じたものか疑問に思われるものもある。たとえば、1歳児で⑨を記載している事例3である。保育指針の⑨は、「危険な場所や災害時などの行動の仕方が分かり、安全に気を付けて行動する。」というやや難しい内容である。しかし、事例を確認してみると、「保育者の言葉かけで、危ないことが分かり始める」と記載されており、⑨の内容を1歳児に相応しいものにアレンジしている。

もう1つ事例をみてみよう。5歳児で比較的容易な内容②を取り上げている事例7-4である。

保育指針②は「いろいろな遊びの中で十分に体を動かす。」というやや漠然とした内容である。事例7-4では、「集団遊びなどで活発に体を動かし、自ら挑戦したりさまざまな運動器具に進んで取り組みその楽しさを味わう。」と、集団遊びがすでにできるようになり、運動機能が発達している5歳児に相応しいものになっている。

(2) 人間関係

保育指針の「人間関係」の内容は14項目である。番号順に次のキーワードを抽出した。「①身近な大人や友だちに関心を持つ」「②ともに過ごす喜びを味わう」「③自分で考え行動する」「④自分でできることはする」「⑤友だちと積極的に関わる」「⑥自分の思いを伝える」「⑦友だちと活動する」「⑧友だちと共通の目的をもって活動する」「⑨善悪を意識する」「⑩異年齢の友だちとの関わり」「⑪決まりを守る」「⑫共同の遊具や用具を大切に使う」「⑬地域の人々との関わり」「⑭異文化への関心」である。

年齢	0	1	2	3	4	5	合計	割合
ねらい	(1)	0	0	0	0	0	0	0%
	(2)	1	0	0	1	0	2	100%
	(3)	0	0	0	0	0	0	0%
内容	①	4	11	0	0	0	15	14%
	②	0	0	2	1	0	3	3%
	③	0	0	0	0	1	1	2%
	④	0	0	0	0	0	0	0%
	⑤	0	0	4	1	2	7	6%
	⑥	0	1	4	1	6	12	14%
	⑦	0	0	2	5	2	9	9%
	⑧	0	0	2	1	0	3	3%
	⑨	0	0	0	1	0	1	1%
	⑩	0	3	0	6	5	14	15%
	⑪	0	0	2	4	6	12	16%
	⑫	0	0	0	0	1	1	2%
	⑬	0	0	0	1	2	3	7%
	⑭	0	0	0	1	1	2	3%

ねらいの数に注目すると、全年齢を通じて2回登場しているのみで、年齢はそれぞれ0歳と3歳であった(事例4と6-1)。

内容の数は、①⑥がそれぞれ、全体の14%、⑩が15%、⑪が16%で、他は10%未満であった。0歳では、人間関係の記述そのものがない事例が半分以上あった。

年齢に関連づけてみると、1歳では①に集中しており、2歳で⑤⑥に集中している。3歳で⑦に集中し、4歳で⑥⑩⑪に集中している。5歳で⑧⑩⑬に集中することから、発達段階に応じて、おおむね、難しいものへ移行しているとみることができる。また、④の「自分でできることは自分でする」は、全年齢を通じて、1度も登場していなかった。

(3) 環境

保育指針の「環境」の内容は12項目である。番号順に次のキーワードを抽出した。「①聞く、見る、触れる、嗅ぐ、味わうなど感覚の働き」「②様々な遊び」「③自然の大きさ、美しさ、不思議さに気付く」「④様々な物の性質や仕組みへの関心」「⑤季節による変化」「⑥身近な事象を遊びや生活に取り入れる」「⑦飼育、栽培、生命の尊さ」「⑧物を大切に使う」「⑨工夫して遊ぶ」「⑩数量、図形への関心」「⑪標識、文字への関心」「⑫保育所内外の行事」である。

年齢		0	1	2	3	4	5	合計	割合
ねらい	(1)	0	0	0	1	1	0	2	100%
	(2)	0	0	0	0	0	0	0	0%
	(3)	0	0	0	0	0	0	0	0%
内容	①	11	1	0	1	0	0	13	11%
	②	3	7	2	1	0	0	13	11%
	③	0	3	3	1	1	1	9	7%
	④	1	4	1	4	3	1	14	12%
	⑤	0	0	1	1	0	1	3	2%
	⑥	0	1	0	2	2	3	8	7%
	⑦	1	7	4	6	4	6	28	23%
	⑧	0	0	0	1	0	0	1	1%
	⑨	0	9	0	0	2	2	13	11%
	⑩	0	0	0	0	6	0	6	5%
	⑪	0	0	0	2	1	8	11	9%
	⑫	0	0	0	0	1	1	2	2%

ねらいの数に注目すると、全年齢を通じて2回登場していた。年齢に着目すると、3歳と4歳で事例6-2で引用されていた。

内容の数は、多い順に、⑦が23%、④が12%、①②⑨が11%、その他は10%未満である。最も多く引用されていた⑦は、「身近な動植物に親しみを持ち、いたわったり、大切にしたり、作物を育てたり、味わうなどして、生命の尊さに気付く」というもので、「動植物をいたわる」ことを通じて「生命の尊さに気付いたり」「生命があることに気付く」という意味のものが多かった。

年齢に関連づけてみると、0歳から5歳まで、発達段階に応じて記載されていた。たとえば、次のような事例である。

「保育士と一緒に身近にある植物や小動物に興味を持ち、触れようとする。」(事例1、0歳)

「身近な自然と関わる中で、その生態を知り、生命の尊さに気付く。」(事例2-1、5歳)

上記の事例をみると、事例1の0歳児では、「植物や小動物に興味をもつ、触れようとする」ととどまっているが、事例2-1の5歳児では、興味を持ったり、触れたりするだけでなく「生命の尊さに気付く」という、レベルアップした内容になっている。

(4) 言葉

保育指針の「言葉」の内容は12項目である。番号順に次のキーワードを抽出した。「①保育士などの応答的な話しかけ」「②ごっこ遊び、言葉のやり取り」「③興味関心をもつ、聞く、話す」「④したこと見たこと等を言葉で表現する」「⑤したい事して欲しい事等を言葉で表現する」「⑥注意して聞く、相手に分かるよう話す」「⑦必要な言葉を使う」「⑧日常のあいさつ」「⑨言葉の楽しさ美

しさに気付く」「⑩イメージや言葉を豊かにする」「⑪絵本、物語」「⑫文字」である。

ねらいの数に注目すると、全年齢を通じて1回、4歳で登場していた（事例6-1）。

内容の数は、多い順に、⑪が全体の16%、②が15%、④が13%、①が12%で、その他は10%未満である。

年齢に関連づけてみると、0歳で①に該当するものが多く、1歳、2歳になると②に該当するものが多い。3歳、4歳になると④へ移行し、5歳では、⑥⑪⑫が多い。⑨については、3歳児で1回みの登場となっている（事例5-1）。

最も登場数が多い⑪は、「絵本や物語などに親しみ、興味を持って聞き、想像する楽しさを味わう。」というもので、年齢に応じてアレンジしやすい内容である。⑪は、各年齢で登場するが、年齢が上がるにつれて引用数が増えている。また、5歳に注目すると、「絵本や物語」に親しむために必要な「人の話を聞く」、「文字などで伝える」という⑥と⑫もともに増えている。集計上においては、内容の一貫性がみてとれる。

年齢		0	1	2	3	4	5	合計	割合
ねらい	(1)	0	0	0	0	0	0	0	0%
	(2)	0	0	0	0	1	0	1	100%
	(3)	0	0	0	0	0	0	0	0%
内容	①	15	3	0	0	0	0	18	12%
	②	4	8	8	4	0	0	24	15%
	③	1	3	3	2	1	1	11	7%
	④	2	4	3	5	6	1	21	13%
	⑤	1	2	2	5	0	1	11	7%
	⑥	1	0	1	0	4	5	11	7%
	⑦	0	2	2	2	1	1	8	5%
	⑧	0	2	2	1	2	1	8	5%
	⑨	0	0	0	1	0	0	1	1%
	⑩	0	0	0	2	2	2	6	4%
	⑪	1	3	4	6	4	8	26	17%
	⑫	0	0	0	1	3	8	12	8%

(5) 表現

保育指針の「表現」の内容は10項目である。番号順に次のキーワードを抽出した。

「①様々な素材に触れる」「②保育士等と一緒に遊ぶ」「③音、色、形、手触り、動き、味、香等に気付く」「④様々な出来事に触れる」「⑤感動したことを伝え合う」「⑥自由に書いたり作ったりする」「⑦工夫して遊ぶ」「⑧音楽、歌、リズム楽器」「⑨書いたものを遊びに使ったり飾る」「⑩演じて遊ぶ」である。

ねらいの数は、全年齢を通じて1回のみ、0歳で登場していた（事例4）。

内容の数は、多い順に、②が21%、⑩が15%、⑥が14%、⑦が13%、③が11%で、その他は、10%未満である。

年齢に関連づけてみると、0歳で①②③に集中しており、1歳になると②に集中している。2歳では②③⑦⑩と分散し、3歳で⑥⑦に集中する。4歳で⑧⑨⑩に集中し、5歳で、再び⑥⑦⑧⑩に分散している。

他の領域の内容と異なる点として、表現の領域に、「言葉」や「環境」の内容が記載されている事例がみられた。事例1の3、4歳児の「表現」の記載内容をみてみよう。

年齢		0	1	2	3	4	5	合計	割合
ねらい	(1)	0	0	0	0	0	0	0	0%
	(2)	1	0	0	0	0	0	1	100%
	(3)	0	0	0		0	0	0	0%
内容	①	5	2	1	0	0	0	8	7%
	②	5	12	5	1	0	0	23	21%
	③	4	3	2	3	0	0	12	11%
	④	0	0	1	0	0	1	2	2%
	⑤	0	0	0	1	1	2	4	4%
	⑥	2	0	1	5	3	5	16	14%
	⑦	0	2	2	6	1	3	14	13%
	⑧	0	1	0	2	4	3	10	9%
	⑨	0	1	0	0	5	0	6	5%
	⑩	0	0	2	5	4	6	17	15%

「自分の気持ちを自分なりの言葉で伝えようとする。」（事例1、3歳）

「自分の気持ちを自分なりの言葉で伝える。」（事例1、4歳）

上記の事例をみると、「表現」か「言葉」か区別し難い内容である。それぞれの領域の記載内容が互いに重複してしまうのはやむを得ない面もあるが、項目が分かれているならできるだけ内容が重ならないよう記載したほうがいだろう。

2. 「言葉」の具体的分析

さてここで、本研究の第2の目的である、「言葉」の領域に焦点をあて、子どもの言葉を伸ばすために必要な教材や、保育者の配慮事項を把握し、子どもの発達をたしかめる観察項目を作成する。

清水ほか（2011）は、自治体が編集した「保育課程」の「言葉」の記載内容から、保育者が準備すべき絵本や配慮事項について言及している。本研究では、これに倣って作成していくが、分析対象として、すべての年齢に共通して保育指針の言葉の内容⑩が登場する事例7-3を選定することにする。言葉の内容⑩は、「絵本」に関する事項であるので、準備すべき絵本について言及する上で適している。また、内容⑩が、年齢が上がっていくに伴いどのように変化していくかを一眼で把握することができるからである。

分析の視点として、まず、「言葉」の領域の記載内容から、保育所が整備しておくべき環境や教材と、保育者が配慮すべきことを見出ししていく。そのうえで、観察項目の作成を試みる。なお、下記の図の記載内容の番号は、該当する保育指針の内容の番号である。

概ね 0-1 歳児	概ね 1-2 歳児	概ね 2-3 歳児	概ね 3-4 歳児	概ね 4 歳児	概ね 5-6 歳児
<ul style="list-style-type: none"> ・語りかけられることにより声を出したり応えようとする。① ・絵本やわらべうたを大人と一緒に経験し、その他の示唆、心地よさを知る。⑪ 	<ul style="list-style-type: none"> ・話しかけややりとりのなかで実感と言葉が結びつく経験を楽しむ。② ・自分の好きな絵本を保育士と楽しみながら繰り返し返しの言葉を模倣する。⑪ 	<ul style="list-style-type: none"> ・大人が子どもの言葉に耳を傾けることで、話す楽しさを知る。③ ・実際にみたこと感じたことを片言で自分の言葉で伝える。④ ・保育士や友だちと一緒に言葉のやり取りを楽しみながら、絵本や紙芝居の好きな場面を再現する。⑪ 	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちの話を聞いたり保育士に質問したり、興味をもった言葉によるイメージを楽しむ。⑤ ・絵本や紙芝居の内容がわかりイメージを広げてごっこ遊びを楽しむ。⑪ 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の思いを伝えたり、相手の話を聞いて、みんなで話し合うことを楽しむ。⑥ ・絵本・童話・生活経験からイメージを広げ、いろいろな方法で伝える。⑪ 	<ul style="list-style-type: none"> ・人の話を聞いたり身近な文字にふれたりして言葉への興味を広げる。⑫ ・自分の思いを伝えたり友達の話聞く力が育つ。⑥ ・絵本や物語を楽しむ、感じたこと、想像したことを言葉で伝えたり、演じたりする。⑪

図1 事例 7-3 「言葉」の領域

0歳は、自ら言葉を発するという段階ではなく、保育士等の語りかけに声をだして応じるという段階であり、「絵本やわらべうたを大人と一緒に経験」するという内容になっている。この時期、保育者は、絵が中心の本を用意し、絵本の内容に適したわらべ歌を準備しておくといことがわかる。

一語文、二語文が話せるようになってくる1歳では、言葉のやりとりのなかで語彙を増やしたり、保育士とともに絵本をよみながら言葉を模倣するという、発達段階に応じた内容になっている。子どもが模倣しやすい言葉で、繰り返しのある簡単な絵本を準備したらいいことがわかる。また、保育者は、「実感と言葉が結びつく」ように、子どもにとって身近なこと（たとえば、家族や食べ物、動物等）と言葉が結びつくよう配慮したり、声に高低や強弱をつけて、繰り返しの言葉をよみかかせるといいだろう。

2歳～3歳では、「話す楽しさを知る」という内容になっている。記載内容から、保育者は、子どもが遊びのなかで、ある場面を再現しやすい、絵本や紙芝居を準備する必要があることがわかる。

3歳～4歳では、聞く、話すの両方ができる段階となっている。記載内容から、子どもが物語のなかの登場人物になり、ごっこ遊びができるような、身近でストーリー性のある絵本や紙芝居を準備するといことがわかる。

4歳では、聞く、話すことから一歩進み、みんなと話し合えるという内容になっている。絵本だけでなく、世界が広がるような童話も用意しておくといだろう。

5歳では、「身近な文字にふれ」て、「物語を楽しむ」むことができるようになる段階であるので、少し長いストーリーの本を用意してもいいことが分かる。保育者は、子どもが絵本や童話から遊びに展開できるよう配慮することが示唆される。

以上のように、「言葉」の領域に焦点をあて、保育者が準備すべき絵本や配慮事項を抽出してき

たが、これらは保育現場で直接活かすことができるだろう。また、このような要領で、他の領域についても準備する教材や配慮事項を見出すことができるだろう。

次に、清水ほか（2011）が明示した「言葉」の観察項目に倣い、保育課程に対応した「言葉」の領域の観察項目の作成を試みる。そこで、まず、清水らが、保育課程と観察項目をどのように対応させているかを確認しよう。保育課程の「言葉」のねらいおよび内容の2歳、4歳と、それぞれに対応する観察項目を一部抜粋する。

ねらい・内容	観察項目
生活に必要な簡単な言葉を聞き分け、また、様々な出来事に関心を示し言葉で表す。(2歳)	・生活に必要な言葉を聞き分ける。 ・自分の名前が言えたり保育者や友だちの名前を言う。 ・様々な出来事に関心を示し、言葉であらわす。(2・3歳)
考えたこと、経験したことを保育士等に話したり、友だちに話したりすることを楽しむ。(4歳)	・身近な出来事や家庭での出来事を話す。 ・友だちとの会話を楽しむ。 ・自分の思いを話したり、相手の話を聞くことができる。(4・5歳)

図2 清水ほか（2011）に掲載されている「言葉」のねらいと内容とそれに対応した観察項目を一部抜粋

上記に示したとおり、ねらい・内容の記載内容に応じた観察項目となっていることが分かる。この観察項目は、子ども一人ひとりの「言葉」の発達をチェックすることができる実践的なものとなる。それでは、清水らを参考にして観察項目を作成してみる。なお、字数に限りがあるため、ここでは、図1で取り上げた「事例7-3「言葉」の領域」の各年齢から、記載内容を1つ選び、それに対応する観察項目を作成する。

ねらい・内容	観察項目
・語りかけられることにより声を出したり応えようとする。(0・1歳)	・保育士等に声をかけられたらなん語や表情で応えることができる。(0・1歳)
・自分の好きな絵本を保育士と楽しみながら繰り返しの言葉を模倣する。(1・2歳)	・簡単な言葉を繰り返したり模倣することができる。(1・2歳)
・実際にみたこと感じたことを片言で自分の言葉で伝える。(2・3歳)	・自分が見たこと感じたことを言葉で表すことができる。(2・3歳)
・友だちの話を聞いたり保育士に質問したり、興味をもった言葉によるイメージを楽しむ。(3・4歳)	・相手の話を聞いたり、疑問に対して訪ねることができる。(3・4歳)
・自分の思いを伝えたり、相手の話を聞いて、みんなで話し合うことを楽しむ。(4・5歳)	・みんなと話し合うことができる。(4・5歳)
・絵本や物語を楽しみ、感じたこと、想像したことを言葉で伝えたり、演じたりする。(5・6歳)	・絵本や物語の内容に興味をもち、遊びを通じて表現できる。(5・6歳)

図3 「言葉」のねらい・内容とこれに対応した観察項目

上記のように、各年齢のねらい・内容に対応するような観察項目を作成してみた。では、この観察項目が、保育現場でどのように活用できるかを考えてみよう。まず、保育者は、観察項目に沿って子どもの「言葉」の発達をチェックする。もし、これらの項目を満たしていない子どもが増えて

きたと気づいたとき、「言葉」のねらい・内容を再検討していくことが求められる。そして、修正された記載内容に対応した観察項目を作成し、子どもの発達をチェックする、というサイクルを繰り返すことによって、保育の計画と保育実践を連動させることができ、保育の質の向上につながっていくのである。

V. まとめと考察

本研究の目的は、第1に、田中（2012）の研究を参考に、保育課程の5領域の内容を、分析視角や選定基準等を設定したうえで分析を行い、第2に、第1の分析をふまえ、保育課程の「言葉」の領域に焦点をあて、子どもの言葉を伸ばすために必要な教材や配慮事項を見出し、観察項目を作成することであった。

ここで、分析から明らかになったことを整理し、本研究の限界と今後の課題を論じる。

本研究は、教科書に掲載された保育課程13事例を対象に分析を行った。分析視角として、①保育指針のねらいと内容が保育課程の事例とどの程度対応しているか、②事例に記載された内容が年齢に相応しいものかどうか、③事例のねらいと内容の整合性についての3つの点に着目した。その結果、次のことが明らかになった。

まず、①の保育指針と保育課程の事例の対応については、5領域すべてにおいて、内容の登場数に偏りがみられた。ある内容が集中的に何度も登場してきたり、5年間一度も登場しないものもあり、この点は、田中の分析結果と共通していた。だがこの結果から、保育指針の内容を偏りなく保育課程の5領域に引用するべきであると一概に言いきれない。保育指針の内容を見直す必要があるという見方もできるからである。したがって、この点について今後検討していく必要がある。

②の年齢に相応しい内容かどうかについては、保育指針の内容の番号が上がるにつれて高度なものになっていることを前提に分析した。集計表を概観すると、年齢に相応しいものか疑問に思われるものがあつた。田中の分析においても、同様の指摘があつたが具体的にどの部分が該当するのかについて示されていなかった。そこで、本研究は、事例の記載内容に踏み込んで分析した。

集計表の数値をみると、同じ番号に集中していたり、低年齢で、高度な内容になっているもの等があつたが、IVの分析で具体的に示した通り、各年齢にふさわしい内容にアレンジされていた。IVで示した記載内容は、保育者が、保育課程を編成していく際に役立つと思われる。

③のねらいと内容の整合性については、本研究が分析対象とした13の事例において、ねらいと内容の両方を記載したものは2事例のみで、他は内容だけを記載していた。両方記載されていた2事例のねらいには、保育指針の記載事項がそのまま引用されていた。また、他の11事例は内容のみであった理由は、記載するスペースに制限があることと、ねらいより内容のほうがより具体的であるからではないかと思われる。

第2の目的については、清水ほか（2011）の分析視点に合わせ、保育課程の「言葉」の記載内容から、子どもの「言葉」の発達を促すために必要な教材や環境、配慮事項を見出し、観察項目を作成した。これらの試みは、清水らが述べているように「子どもの発達を支援するような指導の工夫につながる」（清水ほか 2011：129）だけでなく、保育課程を分析し、保育所が子どもの発達をどのようにとらえ、どのような関わりをしているのかを理解した保育者の養成に貢献するだろう。

以上のまとめと考察をふまえ、本研究の限界と今後の課題について論じる。まず、保育課程13事例という限定された範囲における5領域の分析であつたことがあげられる。したがって、本研究の結果が他の事例にあてはまるとは限らないだろう。しかし一方で、限られた事例のなかでも分析

方法を設定したことにより、他の事例に応用することができ、比較考察することが可能となっただろう。次に、保育指針と保育課程の事例をつきあわせていく際の基準は厳密でなかったことが挙げられる。基準を厳密に設定した場合、結果が異なることが考えられるだろう。

今後の課題は、教科書に限定せず、保育所や自治体によって編成された保育課程を対象に内容分析を行うことと、保育課程が保育現場でどのように活用され、保育者がどのように評価し改善していくかのプロセスを明らかにしていくことである。

【注】

¹ 分析の詳細は、庭野（2012a）を参照。上記5項目の説明は、教科書において保育指針や保育所保育指針解説書（厚生労働省）、改定保育所保育指針 Q & A50（厚生労働省）の記載内容を、読者に分かりやすく説明し整理している。

【文献】

- 保育とカリキュラム編集部編,2009,『新指針・新要領イラスト図解ガイド:保育課程の参考例も解説』ひかりのくに.
- 保育総合研究会監修,2008,『新保育所保育指針サポートブック:保育課程から指導計画作成まで:今日から使える!』世界文化社.
- 今井和子・天野珠路・大方美香編著,2010,『独自性を活かした保育課程に基づく指導計画:その実践・評価』ミネルヴァ書房.
- 神長美津子・塩谷香編著,2010,『教育課程・保育課程論』光生館.
- 亀谷美代子・永倉みゆき・師岡章・溝口綾子著,金村美千子編著,2011,『新保育課程・教育課程論』同文書院.
- 北野幸子編著,2010,『乳幼児の教育保育課程論』建帛社.
- 北野幸子編著,2011,『保育課程論:保育の内容・方法を知る』北大路書房.
- 厚生労働省,2008,『保育所保育指針』.
- 厚生労働省,2008,『保育所保育指針解説書』.
- 厚生労働省,2008,『改定保育所保育指針 Q & A50』.
- 丹羽孝,2011,「保育所保育課程の研究」名古屋市立大学大学院人間文化研究科人間文化研究 14: 1-23.
- 庭野晃子,2011a,「「保育課程」の内容に関する一考察:保育所保育指針(2008)に対応した教科書分析Ⅰ」静岡県立大学短期大学部研究紀要 25:39-51.
- 庭野晃子,2011b,「「保育課程」と各種「指導計画」の連続性に関する一考察 保育所保育指針(2008)に対応した教科書分析Ⅱ」静岡県立大学短期大学部研究紀要 25-W 号
- 大坪祥子,2008,「保育課程とその編成」宮崎学園短期大学紀要 1: 45-58.
- 清水益治・小椋たみ子・鶴宏史・南憲治,2011,「保育所における保育課程の編成に関する研究」帝塚山大学現代生活学部紀要 7:117-132.
- 田中敏明,2012,第65回 日本保育学会発表資料「保育雑誌に掲載される年間指導計画の分析と評価」
- 余公敏子,2010,「我が国における幼児教育課程に関する考察-幼稚園教育要領と保育所保育指針との比較を中心に」教育経営学研究紀要 13:29-35.
- 余公敏子,2011,「保育所保育指針の変遷と保育課程に関する考察」九州大学大学院教育学コース院

生論文集 11:41-57.

横松友義, 2011, 「保育課程経営研究の提唱」岡山大学大学院教育学研究科 146:1-6.